

Umbrella-Japan Pathology Review Meeting 2023

経緯

Umbrella Protocol を採用した地域の病理診断サーベイランスを目的として、SIOP-RTSG 病理部門から日本で標記を開催したいとの申し入れがあり、COVID19 感染症の第 5 類移行を確認して日程を調整し、2023 年 10 月 20-21 日に開催となりました。

場所

兵庫医科大学病院の病理学教室（廣田誠一教授）のご厚意で同講座のカンファレンスルームを使用させていただきました。

参加者(敬称略、* Coordinator)

SIOP-RTSG: Gordan M Vujanic* (Qatar, chair of SIOP-RTSG pathology panel), Christian Vogel (Germany), D'Hooghe Ellen (Norway), Norbert Graf (Germany)

日本：市川宇宙、井上健、大植孝治*、大喜多肇*、越永従道、坂井田美穂、澤田明久、銭谷昌弘、高橋加奈、田中水緒、田中祐吉*、中田佳世、福島裕子、松岡圭子*、吉田牧子

内容

10 月 20 日午後から 21 日午前にかけて、田中（祐）による過去 10 年の JWTS 症例病理の overview を皮切りに、U-J 症例 15 例、JWTS archival cases, SIOP-RTSG selected cases を呈示・討議しました。U-J 症例、JWTS archival cases は、大部分松岡・大喜多両先生が、SIOP-RTSG 症例は海外メンバーが顕微鏡画像投影方式でプレゼンしました。21 日午前の最後には Dr. Vujanic によるミニレクチャーも行われました。内容は過去四半世紀の SIOP Renal Tumor Trials における臨床病理学的アプローチの推移・現状と今後の方向性で、治療後の組織像の解釈とそれを踏まえた最新の stage 判定に特に重点が置かれており、その他には造腎組織遺残の評価の仕方など日本からの参加者には新鮮なものがありました。

総評

これまで同様の小児腎腫瘍病理診断の review としては、欧州や南米の症例を対象としたオンラインミーティングに参加したことはありましたが、SIOP-RTSG の中心メンバーを迎えて直接の討議や解説の機会を得たのは初めてで、日本からの参加者全員にとって大変貴重で有意義なものになったと思います。日本の病理医は欧米に比べて施設や症例数あたりの人数が少なく、地理的にもハンディがある上に、近年ではコロナ禍等の影響で国際活動の制約があるところです。今回は、病理診断に関わる最新の情報の確認だけでなく、休憩時間の雑談、懇親会やミーティング後の奈良観光を通じて、個人的な交流も深められたことと思います。今後もこの流れが継続することを期待しています。



Dr. Gordan M Vujanic

Dr. Vujanic は国際小児腫瘍学会腎腫瘍研究グループの病理委員会委員長で、セルビア出身、現在はカタールの Sidra Medicine and Weill Cornell Medicine の教授です。

小児腎腫瘍の病理診断を専門とし、診療に直結する病理診断の手順書の作成に携わり、現在も小児腎腫瘍のより適切な診断と治療を目指して国際的に活動しています。今回は二度目の来日でした。